

福武 直

蓮見 音彦（東京学芸大学・和洋女子大学名誉教授）

農村社会学を中心に多くの著書・論文を残した福武直（1917-1989）は、戦後改革・経済成長の過程で変化する日本農村の実態調査を数多く手がけてきた。聞き取りと資料収集に基づいて調査報告をまとめていく手法が中心であったが、農民を対象に質問紙を用いた、当時としては珍しい統計的な調査も試みている。調査地は日本各地にわたり、毎年いくつもの地域で調査を行ってきただけに、「調査の達人」の1人であることは確かである。

しかし、社会調査の発展や普及にとつての福武の果たした役割は、むしろ社会調査についての体系的な書物をまとめ、社会調査についての理解を広めたことにおいて評価される。今では社会調査を手がけようとする人は、少し大きい書店に行けば社会調査の方法や技術について幅広く理解することのできる書物をいくつも見出すことができ、むしろ選択に迷うほどになっているが、第二次世界大戦後数年のようやくさまざまな分野で社会調査が進められるようになった当時には、適切な手引きとなる書物はまだほとんどなかった。

1958年に岩波全書の1冊として刊行された『社会調査』の「はしがき」に福武は、「社会調査は、社会科学の実証性を高めるために、またその結果に基づいて人間社会を前進させてゆくために、不可欠の重要性をもっている。さらに、それは、実際的にも、あらゆる面で広く利用されるようになっていく。現代の社会生活は、社会調査なしには営めないといってもよいであろう。ところが、この社会調査の全般を概説した書物は、これまでのところ、日本ではきわめて乏しい。戦後社会調査が盛んに行われるようになったことを反映して、特に標本調査の発達に促されて、標本抽出法に関する書物などは多数刊行されてきた。しかし、社会調査の意義を明らかにし、その全般にわたって体系的な説明を加えた概説書は、ほとんど世に問

われてこなかったのである。本書は、こうした空隙を埋めるために書かれた」と書いている。この書は、社会調査の意義、調査の計画、現地調査の技術、調査結果の処理、の4章から構成され、統計調査と実態調査の両者を視野に入れて、それぞれの特質にふれるだけでなしに、標本抽出や社会測定の方法まで説明してあり、刊行後かなりの期間にわたって、社会調査の行き届いた入門書として多くの読者に活用された。

福武は、この書物の前にすでに、1952年には、アメリカで社会調査の教科書として広く用いられていた、G. A. ランドパークの『社会調査』（東京大学出版会）を「調査法一般に関する良書が訳出されて社会調査に従う人々の共有財産になること」を願って、安田三郎とともに翻訳して刊行している。また、1954年には、具体的な調査に当たって参考となるようにと、農村・都市・労働者意識・犯罪非行などについて、それぞれの調査の方法を示す『社会調査の方法』（有斐閣）を編纂していた。その後も、1955年には、古島敏雄との共編で『農村調査研究入門』（東京大学出版会）を、さらに1967年には、松原治郎との共編で『社会調査法』（有斐閣）を刊行しており、社会調査の方法の定着に努めてきた。

豊富な社会調査の経験に基礎づけられ、平易に書かれたこれらの書物が多くの読者に受け止められ、社会調査がその後活発に行われるようになってゆく原動力となった。その意味では、彼は「調査の達人」であるとともに、調査の「普及の達人」でもあった。



ただ一篇の社会学的モノグラフから

奥田 道大 (立教大学名誉教授)

『ストリート・コーナー・ソサエティ』(以下 S.C.S)の初版後50年を期して刊行された改訂拡大版の翻訳に際して、日本人読者へのメッセージをW.F.ホワイトに求めた。直筆の返事が早速届けられ、感銘を深くした。「日本人読者に1人でも多く読んで欲しい」といった言葉は一切なく、次のような文章がつづられていた。

—ただ1つのケース・スタディだけで、普遍的な結論を導くことができるのだろうか。私はこれが可能だということを示そうとした……。

ホワイトは、この言葉を残して、間もなくその生涯を閉じた。

後年、日本のある家族社会学者と歓談した際、彼は、『ただ1つのケース・スタディだけで、1つの普遍的な結論を導くことができるのか』というホワイトの言葉は、その気持ちで調査に臨んでも、私には生涯言い出せない言葉だ』と述べていた。

ホワイトは社会学者としてどちらかと言えば、地味な人生を送ったと言えるかもしれない。しかし、社会学的眼力には確かなものがあつた。S.C.Sの底本となるモノグラフは、当初シカゴ大学に博士論文として提出されている。しかし、論文審査に当たったL.ワースにとって、ホワイトのスラムに対する視座と研究手法は受け入れがたいものであり、質疑の中で激高して「地獄へ行け」とまで口にする。「あなたこそ、お先にどうぞ」と返すホワイトの言葉には、彼の心根と研究手法への確かな自信がにじむ。後年、原本にくり返し手を入れ、まったく新しい1冊として『ストリート・コーナー・ソサエティ』は刊行の運びとなったが、学界的に本格的な評価の対象となり、古典としての地位を確立するのに約半世紀を要した。冒頭のホワイトの言葉はその状況を受けての「控えめな勝利宣言」である。

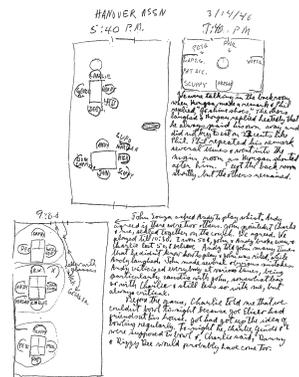
S.C.Sは1943年、55年、81年、そして93年と版を重ねるが、第2版から調査手法や詳細な日

誌を収録した付篇が改訂ごとに増補され、付篇それ自体が「もう1冊」のS.C.Sとも言うべき内容の充実を見せている。そして、当時の膨大なフィールド・ノート等の原資料のすべては、現在、コーネル大学の付属図書館等に収められている。日本でも社会調査資料室の必要性が言われて久しいが、「ホワイト・ミュージアム」は、1つの参考となるかもしれない。

S.C.Sの初版からほぼ50年の時を経たアメリカで、同じインナー・シティのコミュニティをフィールドとした、気鋭の黒人社会学者、E.アンダーソンによる『ストリート・ワイズ』が刊行された。S.C.Sとは対照的に、同書は刊行と同時に一躍話題をさらった。この後、半世紀を経た時に、『ストリート・ワイズ』にはどのような評価が下されているのだろうか。

さて、筆者自身、1980年代から学生とともにわが国における「ニュー・カマーズ」の外国人調査に当たった経験をもつ。S.C.Sの講読は以前からゼミの定番メニューであったが、外国人定住者が増加するプロセスで、同書をわが国の文脈に置き換えて読むことが可能になった時期に入ったことを実感した。

資格認定制度がスタートし、多くの社会調査士が誕生している。今後、わが国でも第二、第三のS.C.Sが編まれることを、期待してやまない。



ホワイト作成のフィールドノート